

多喜二の小説「春ちゃんの場合」の場合

倉 田 稔

もくじ

- 1 龍介とS子
 - 2 春ちゃんの場合
 - 3 原稿
 - 4 モデル
- 結

1 龍介とS子

小林多喜二は、『新興文学』(1) 創刊号に向けて、小説を投稿した。

この創刊号は、1922年(大正11年)11月号で、1日に発行された、とある。小林多喜二はこの時、小樽高商の2年生であった。彼はこの号のために「龍介とS子」を投稿した。この号では、「募集小説選評」という記事を宮島新三郎が書いている。

宮島新三郎は、1892年生まれで、埼玉県出身という説と東京出身という説がある。彼は、東京中学を出て、早稲田大学英文科を大正4年に卒業した。中学の英語教師などを勤め、また、『早稲田文学』の編集に参加した。1926年にイギリスに留学し、1927年に早稲田大学の教授になり、英文学・批評史を講じた、1934年に亡くなった。英米新文学の研究・紹介者であり、またプロレタリア文学の理論家として批評活動を展開した。『遺稿 明治文学概論』(東京出版社 1934年)、『明治文学 十二講』(1925年)、『大正文学 十四講』(1926年)、『芸術改造の序曲』など、多数の著書と、翻訳がある。

さて宮島の稿は、創刊号125ページに載っており、目次では「募集小説選評」とあるが、「小説六篇を読んで」が主題である。

この六篇というのは、全国から応募された小説が沢山あって、そこから六編が選ばれたのか、応募小説が六篇だけだったのか、分からない。ただし、『小林多喜二全集』第七巻(新日本出版、1984年版、646ページ)に、「龍介とS子」が、「予選入選」したとある。宮島が「本誌の編輯者から豫選して、託された六篇」(125ページ)と書いてあるので、選ばれた六編であろう。

多喜二の小説について、宮島は書いている。「小林君の「龍介とS子」は、もつとひきしめて書いたら好いものになつたろうと思ふ。文章のたどたどしいのも気になる。」(125ページ)

宮島は最後に、「そこで以上の六篇に等級をつけてみると次のようになる。」とし、一、山寺(赤城) 二、抗夫(高崎) 三、破局(柳田) 四、敗惨者(平瀬) 五、龍介とS子(小林多喜二) 六、蕉心(秋丸)、とした。

このうち、第一位の小説「山寺」が当選作として本誌に載ったのである。小林多喜二は残念ながら五位に甘んじた。

(1) この雑誌については、山田清三郎『転向記』に詳しい。

2 春ちゃんの場合

小林多喜二は、『新興文学』第1巻第2号に、つまり翌月の号にも、小説「春ちゃんの場合」を応募した。前作が当選しなかったことはまだ分からない時期に書いて応募しているだろう。

この第2号は目次にあるように、同じく宮島清三郎が「募集小説選評」を書いている。だが実際は、「応募小説について」という題である。宮島は、編集者から渡された五編の小説を読んで、慨嘆している。

「例へば今度には、青春の悩みとか恋とかを主題にしたものが三篇（山路誠哉君の『祭の一夜』小林多喜二君の「春ちゃんの場合」中野徳子さんの「淋しい晩に」）もあるが 何れもありきたりの材料で、さつとなぜただけの観察しか施されてゐない。」

「尚ほ五編に順序をつけて見ると左の通りである。」（129 ページ）

- 一 父と子
- 二 祭の一夜
- 三 春ちゃんの場合
- 四 淋しい晩に
- 五 縞毛布

多喜二の小説は三番目になってしまった。

このうち、一位の、辻燃露「父と子」が当選作として、誌上に掲載された。一方で、編集局選で「小品」として、3つが、つまり、丘幽美「心臓病」、鶴岡潮路「雀の墓」、石渡正春「或夜の火事」が掲載されている。つづいて佳作4編が選ばれている。

これらの関係がどうなっているのかは分からない。順序をつけられた5編以外に、掲載作3篇と、佳作4篇がある。順序をつけられた二から五はどこにも載っていないし、記されていない。当選作、小品、佳作、の次ぎに、残りの四篇がくるのであろうか。そうなると小林多喜二の小説はかなり低い順番になる。二から四までの作品は、少なくとも、掲載された小品3つよりも低く評価されたであろう。

それはともかく、これらの批評を読んだ多喜二は、がっかりしたと同時に、頑張らねばならないと思ったであろう。

3 原稿

さて、これらの多喜二の小説の原稿はどうなったのだろうか。

雑誌社は、原稿を著者に戻す場合がある。その場合は、多喜二にこの2つの原稿が戻っただろう。そうでなく、雑誌社が著者に原稿を返さなかった場合が考えられる。その場合、多分、編集者の山田清三郎が保管していたのではないか。これらの原稿は未だ見つからない。

4 モデル

多喜二の小説「春ちゃんの場合」は、モデルがいた。信田洋子（現・札幌）さんの母、川崎春江である。

信田洋子さんからの聞き取り（以下、敬称略）から紹介したい。

川崎春江の実家、川崎家は、父が福井の出身であり、春江の親は小樽に住んだ。春江は、明治40年生まれである。川崎家では親が早くなくなり、兄が家長だった。7人きょうだいであった。小樽通運

に勤めたサラリーマンであった。

春江は長女で、高等小学校を出た。もっと上の学校に行きたかったが、行けなかった。家庭の都合だった。両親がすでに亡くなり、きょうだい7人の家族では無理なのであった。成績がよく、学校ではトップであった。北海道銀行に就職した。単純計算すると、大正10年になるであろう。これは現在の北海道銀行ではなく戦前の北海道銀行である。これは後年、拓銀と合併することになる。春江が勤めたのは小樽本店であって、拓銀のななめ前にあった。

春江は、お茶、お花、書道を習った。磯野（かの「不在地主」のモデルになった有名な小樽の資産家）さんのお茶会に出たことがある。

春江の銀行での評判がよいので、北海道銀行で、親戚の娘が採用されるほどだった。

彼女は窓口勤務だった。預金、出納の係りである。袴をはいて銀行へ通った。性格はきちっとしていた。

春江はバイオリンを持っていた。銀行時代であった。それは日本で最初のバイオリンで、鈴木（2）作である。銀行で音楽仲間がいた。

川崎家は火事で何回か引っ越した。もらい火であった。小樽は火事が多かった。当時はランプだから火事になる。そのうちの1カ所では多喜二の家と近かった。

多喜二とは近くの手形交換所で仕事で会うことがあった。

春江は、信田（のぶた）清と結婚することになった。清と会う前に多喜二を知っていた。春江と清は、豊川町（3）に住んでいた。豊川にはかつて川が流れていて、川1つへだてて2人の家がそれぞれあった。ここで2人は知り合ったのであろう。

信田家は新潟の作り酒屋の出身で、小樽にきて豊川町で酒屋を開いた。新潟からの酒を売るのであった。豊川町12か13丁目かにあった。清の父は60才ちょっとで隠居し、息子・長男に譲った。清は次男であった。

清は、明治35年生まれ（1902年）で、多分東京高商に入って、東京で生活したが、病気になり退学し、小樽高商に入り、昭和4年に卒業した。だから尚志会に入った。尚志とは、昭和4年、という意味である。清はこうしてちょうど多喜二の後輩になる。といっても年齢は1才上である。多喜二と清のつきあいはなかったらしい。信田、川崎、両家とも、父母が早く亡くなった。

- (2) 鈴木政吉（安政6＝1859年生まれ－昭和19＝1944年没）。国際的にも賞賛されるヴァイオリン製作に成功し、大企業を作った。名古屋生まれ。父は武士で、生活のために三味線作りを業とした。政吉はそれを受け継ぐが、ヴァイオリンを見て、その製作を決意した。明治20年には助手数名を雇った。創意工夫をかさねて大成功し、国内外から注文がきて、1000人も雇う会社にした。

- (3) とよかわちょう。ここは、近年、なかにし礼の小説の舞台になった。

小林多喜二は、朝、家で売る為の餅をついてから、銀行へきたので、走ってぎりぎりについた。多喜二は、前出の小説「春ちゃんの場合」を書いた。これは落選したわけだが、小樽の文芸同人誌に載ったらしい。

多喜二は小説を書いてから、春江さんにそれを見せた。春江はそれを読んで、多喜二に、実際とは違うではないかと言った。多喜二は、読む人を面白くさせるので、変えた、小説は事実と違うのだよ、

と答えた。春江はこれで噂の人になった。

小説の主人公になるとは、と春江の兄が怒った。婚約者・清の兄も同じ理由で怒った。信田家では結婚に反対し、川崎家もそんな信田家を怒った。信田家では父は発言しなかったが、兄が力を持っていた。両家は仲違いした。当時小説のモデルになるのは堅い家ではモラルに反することだったらしい。その上、小説を書くのは軟派なのであった。

だが2人はそれを押し切って結婚した。だから両家に祝福されなかった。独自で結婚した。信田清は、初め、のぶた、と称した。しかし結婚して、しのだ とした。家の仕打ちに怒ったからである。

こうなると多喜二の小説も罪作りなことになったのである。そのお陰で結婚が反対されるようになったからである。

さて、今見つからない小説は、批評家が、青春の恋と悩みを書いたとしている。春江と銀行で好きになった人との話がテーマになっていたかもしれない。清ではない。

春江は、いつも「多喜二さん」と言っていた。多喜二、その母、チマさんは、人柄がよい、と、また多喜二の家は餅屋だと、表現していた。

春江と清は、昭和6年か7年に結婚した。春江は、結婚するまで銀行に勤めた。清は積極的な人であった。

このころ、北海ホテルのおにぎりで、10人くらいが食中毒で亡くなった、北海道銀行の行員たちの山登りであった。大きな事件となった。

春江は、昭和8年に長女をうむ。次女は、洋子で、昭和10年3月3日生まれである。その後長男を生む。

春江の丸髷の写真がある。結婚すると丸髷になる。写真屋でとった。当時は写真屋でとることが多い。それ以前の銀行員時代の写真もある。

清は、英語がよくできた。テニスをしていた。小樽高商を卒業して、小樽のモービル・オイル（アメリカの会社）に勤めた。そのため、もっと英語ができるようになる。この年は世界大恐慌で、就職は難しかったのだが、清は、卒業して3年で大泊支店（樺太）で支配人をした。清の父は清をかわいがり、大泊に遊びに来た。そしてその大泊で亡くなった。

家には女中さんがいた。春江は、戦争中はともかく、ずっと和服を着ていた。

昭和16年にアメリカとの戦争が始まるが、会社では、すでに1月に対立がおき、閉鎖した。清は、1941年にモービル・オイル大泊支店長をやめ、小樽にもどった。北海製紙へ勤めた。途中からなので、苦勞した。その後、札幌へ行った。清はその後、中小企業へ勤めた。戦争で、畑仕事で、春江は結核になる。栄養剤をうち、離れ座敷で療養して直った。春江は朝日新聞の勉強会に積極的に行った。クラシック・コンサートにも聞きに行った。春江は、昭和55年6月17日亡くなる。72才であった。清は長生きし、88才でなくなった。2人の墓は、北海寺（札幌、南2東3）にある。

結

小林多喜二の小説「春ちゃんの場合」の原稿は見つかっていない。そして、春江の話からすると、この小説は同人誌に載ったと思える。その同人誌も見つかっていない。

これは、小説を書くことが市民権を持っていなかった時代のエピソードである。この頃は小説を書く人は軟派と思われていたのだった。夏目漱石の登場前は、小説書きは、まともな人とは見られなかった。